正史を彷徨う

二十四章　隋書の時代

森隆一

隋文帝　　（Wikipediaより）　　隋煬帝

24. 隋書の時代

序

本章で扱う推古天皇紀の時代に対応するのは、隋書倭条である。次の王朝の唐には、新・旧の 2 つの当初がある。旧唐書には倭条と日本条があるが、新唐書では日本条のみとなっている。一方、推古天皇紀には日本は現れない。国名を使うのは対外的な場合が多く、自国内で国名は使う機会が少ないということも考えられる。この観点からは、古事記は対内的なもので、日本を冠した日本書紀は対外的なものということもできる。

隋書では、その記事と日本書紀・推古天皇紀の記事とが対応が付く。「日出処の天子」の記事がよく知られているが、裴清の記事のほうが興味深い。

隋は 581 年から 618 年まで存続した。この期間の天皇は、敏達天皇 572-585・用明天皇 585-587・崇峻天皇 587-592・推古天皇 593-628 である。

24.1. 隋書の記事

隋書の記事は

倭国は百済・新羅の東南にある。　　**倭國 在百濟 新羅東南**

で始まる。

都は邪靡堆である。これは魏志のいう邪馬台である。

都於邪靡堆 則魏志所謂邪馬台者也

漢の光武帝の時代に朝貢した。大夫と自称していた。安帝の時にまた朝貢した。これが倭奴国である。

漢光武時 遣使入朝 自稱大夫 安帝時 又遣使朝貢 謂之倭奴國

男弟がいて卑彌理国を佐けた。その王は千人の侍婢を有する。その顔を見るのはまれである。男子二人が飲食を給し、言葉を伝える。

有男弟 佐卑彌理國 其王有侍婢千人 罕有見其面者 唯有男子二人給王飲食通傳言語

開皇二十年 600 倭王、姓は阿毎、字は多利思北孤、號は阿輩鷄彌、は使いを派遣した。所司に風俗を訪ねさせたところ、倭王は天を兄とし、日を弟とする。・・・。

開皇二十年 600 倭王姓阿毎 字多利思北孤 號阿輩鷄彌 遣使詣闕 上令所司訪其風俗 使者言倭王以天爲兄 以日爲弟 天未明時出聽政 跏趺坐 日出便停理務

云委我弟 高祖曰 此太無義理

これは有名な記事である。これに次が続いている。

王の妻は雞彌という。後宮には 6・7 百人の女子がいる。太子は利歌彌多弗利という。城郭はない。内官は 12 等がある。初めは大徳で、・・・。

王妻號雞彌 後宮有女六七百人 名太子爲利歌彌多弗利 無城郭 內**官有十二等：一曰大徳**

ぴんいん　邪靡堆：xié mí/mǐ duī、邪馬台：xié mǎ tái

卑彌理：bēi mí lǐ、卑彌呼: bēi mí hū

阿每：ā/ē měi、多利思北孤：duō lì sī běi gū、

阿輩鶏彌：ā/ē bèi jī mí

雞彌：jī mí

利歌彌多弗利：lì gē mí duō fú lì

倭王は、姓が阿每で、字が多利思北孤、號が阿輩鶏彌、といっている。名前の感じからも、また、王の妻の名は雞彌 と書かれていることから、男王である。雞彌 は上にある 阿輩鶏彌 の後 2 文字とピン

インは同じであり、女性の名としては疑わしい。

一方、日本書紀では、600 年は推古天皇八年で、この前後には対応する記事が見られない。また、冠位十二階の制定は推古天皇十一年 603 である。

阿蘇山がある。石が無く火は天に接する。・・・

有阿蘇山 其石無故火起接天 者 俗以爲異 因行禱祭

中国では火山は珍しいということで書いたのか。

新羅と百済は倭を大国としている。珍しいものが多い。これを敬い、通使を行き来している。

新羅 百濟皆以倭爲大國 多珍物 並敬仰之 恒通使往來

中国の王朝も、倭のほうが百済・新羅より大きい国として認めていたのか。

大業三年 607 王の多利思北孤は使いを派遣し朝貢した。使者は次のように言った： 海西の菩薩天子は佛法を重興していると聞く。お

れゆえ、朝拜と沙門數十人を佛法を学ぶため留学のため派遣された。その国書には、日出ずるところの天子、書を日没するところの天子に書き送る。・・・

大業三年 607 其王多利思北孤遣使朝貢 使者曰: 聞海西菩薩天子重興佛法 故遣朝拜 兼沙門數十人來學佛法 其國書曰:日出處天子至書日沒處天子無恙 云云 帝覽之不悅

開皇二十年の記事の 倭王以天爲兄 以日爲弟 とこの 日出處天子至書日沒處天子無恙 の 2 つは有名である。

明年 608 皇帝は文林郎の裴清を倭国に遣わした。百済を巡り竹島に行きつく。南に耽羅国を見、都斯麻国を経て大海に漕ぎ出す。東に進み、一支国・竹斯国に至る。さらに東に進み秦王国に至る。そこの人は華夏と同じで、夷洲としていた。もっともなことである。(?)さらに十数カ国を経て(都の)海岸に達する。竹斯国より東は皆倭に附庸している。倭王は小徳の阿輩台を派遣した。儀仗兵と鼓笛隊を伴う数百人が従っていた。10 日後、大禮の哥多毘が派遣され、200 騎余りで、都に至った。その王は清と会見し、大いに悦びいった: ・・・。

明年 608 上遣文林郎裴清使于倭國 度百濟 行至竹島 南望耽羅國 經都斯麻國

乃在大海中 又東至一支國 又至竹斯國 又東至秦王國 其人同于華夏 以爲夷洲疑不能明也 又經十余國 達於海岸 自竹斯國以東 皆附庸於倭 倭王遣小德阿輩台 從數百人 設儀仗 鳴鼓角來迎 後十日 又遣大禮 哥多毘 從二百余騎郊勞既至彼都 其王與清相見 大悅 曰: 我聞海西有 大隋 禮義之國 故遣朝貢 我夷人僻在海隅 不聞禮義 是以稽留境内 王慕化 故遣行人來此宣諭 既而引清就館其後清遣人謂其王曰: 朝命既達 請即戒途 於是設宴享以遣清 復令使者隨清來貢方物 此後遂絶

裴清の経路は

百濟 → 竹島（南望耽羅國）→ 都斯麻國 → 一支國

→ 竹斯國 → 秦王國 → 十余國 → 海岸 → 都

竹島は南望耽羅國とあるから、全羅南道の多島海にある島であろう。竹斯國の次に書かれている秦王國は全くわからないが、其人同于華夏と書かれている。文林郎という官僚が見て、中国の人と同じということである。

新羅本記には、法興王七年 520 に、頒示律令 始制百官公服 朱紫之秩 とあり、中国の服装を取り入れた可能性が考えられる。この新羅系の移民(亡命)が造った国かもしれない。

至秦王國と書かれていることから、ここにとどまったと思われる。

また、河内との間に十国以上とあることから、山口県か愛媛県辺りが浮かんでくる。長門・周防は神武東征に現れないが、21.5.節での周防に関する考察から、柳井が有力ではないかと考える。

その後十余國を経て到達したということから、この海岸は難波之碕を第1候補とする河内の何処かと考える。

蘇我のピンインは sū wǒ であることを述べたが、周防 のピンインは zhōu fang である。

隋書の記事からは、都が河内にあったか明日香にあったかは判断できない。記事からして、難波之碕からは陸路で行ったと思われる。

煬帝だけどうして‘ようだい’という読みであるのか。

24.2. 唐書の前文

旧唐書倭國条

倭国は古の倭奴國である。京師(長安)より１万４千里で新羅の東南の海中にある。　**倭國者 古倭奴國也 去京師一萬四千里 在新羅東南大海中**

記事は次の２つである。

貞觀五年 631 使いを送り方物を献じた。・・・

遣使獻方物 太宗矜其道遠 敕所司無令歳貢 又遣新州刺史高表仁持節往撫之 表仁無綏遠之才 與王子爭禮 不宣朝命而還

至二十二年 648 新羅を伴ってまた奉表した。これを起居に知らせた。　**又附新羅奉表 以通起居**

旧唐書日本國条 前文

日本国は倭国の別種である。その国が日の上る方にあるために日本という名にした。或いは、倭国の名が雅でないために日本と改めた。

あるいは、日本はもとは小国で倭国の地を併せたという。その人は入朝したもので、大げさでまじめでないので疑わしい。

日本國者 倭國之別種也 以其國在日邊 故以日本爲名 或曰 倭國自惡其名不雅 改爲日本 或云 日本舊小國 併倭國之地其人入朝者 多自矜大 不以實對 故中國疑焉

日本舊小國 併倭國之地 は‘倭国以外(別種)の小国日本が日本列島の倭国の地を併せた’には興味がわく。併せるということは倭国の地以外にあったはずで、それは朝鮮半島しか考えられない。別種とは後漢から魏にかけての倭国を構成する一國であったのではないか。

疑問 ?? 旧唐書の舊小國が倭国の地を併せたとすれば、それは何時か。また、舊小國はどんな国か。卑弥呼や五王と関係があるのか。

日本国の大臣の朝臣真人方物を貢いだ。朝臣真人は中国の戸部尚書である。

長安三年 703 其大臣朝臣真人來貢方物 朝臣真人者 猶中國 戸 部尚書

Wikipedia「長安（元号)」

長安は、武周の武則天の治世に使用された元号。701 年-705 年。

武周には、神功 697-698 という元号もある。

- また使いを送ってきて、儒士を請うたが経を授けた。

開元初 712 又遣使來朝 因請儒士授經

新唐書倭・日本条 前文

- 日本は古の倭奴である。・・・欽明の十一年は梁の承聖元年である。・・・次の用明は目多利思比孤ともいい、隋の開皇末年に始めて中國に通じた。

日本 古倭奴也 去京師萬四千里 直新羅東南 在海中 島而居 東西五月行 南北三月行 國無城郛 聯木爲柵落 以草茨屋 左右小島五十餘 皆自名國 而臣附之 置本率一人 檢察諸部 其俗多女少男 有文字 尚浮屠法 其官十有二等 其王姓阿?氏 自言初主號天御中主 至彦瀲 凡三十二世 皆以尊爲號 居築紫城 彦瀲子神武立 更以 天皇 爲號 徙治大和州 次曰綏靖 次安寧 次懿德 次孝昭 次天安 次孝靈 次孝元 次開化 次崇神 次垂仁 次景行 次成務 次仲哀 仲哀死 以開化曾孫女神功爲王 次應神 次仁德 次履中 次反正 次允恭 次安康 次雄略 次清寧 次顯宗 次仁賢 次武烈 次繼體 次安閒 次宣化 次欽明 欽明之十一年

直梁承聖元年 次海達 次用明 亦曰目多利思比孤 直隋開皇末 始與中國通 次崇峻 崇峻死 欽明之孫女雄古立 次舒明 次皇極 其俗椎髻 無冠帶 跣以行 幅巾蔽後 貴者冒錦 婦人衣純色裙 長腰襦 結髮於後 至煬帝 賜其民錦線冠 飾以金玉 文布爲衣 左右佩銀蘭長八寸 以多少明貴賤

日本 古倭奴也 は隋書とは少し異なる。

梁の承聖元年は 552 年、欽明十一年は 550 年または 549 年である。差は 2 年程であるが、本稿の立場からは新唐書を採用し、作業仮説 23.1 とした。

開皇は隋の最初の元号で 581 年から 600 年であり、その末年は 600 年となる。用明天皇の在位は 585 年から 587 年。これからは、隋書の **開皇二十年 倭王姓阿**每 **字多利思北孤 號阿輩**雞**彌 遣使詣闕** の多利思北孤は用明天皇となる。

日本書紀の皇統が書かれていることから、倭と日本は同じ王朝とわかったのか。

最初の記年記事の太宗貞觀五年 631 で、推古天皇の崩御後である。

日本書紀では、用明天皇の後は、崇峻天皇・推古天皇と続き、第 33 代推古天皇の在位は 593 年から 628 年(推古天皇 36 年)となっている。

24.3. 推古天皇紀　　豊御食炊屋姫天皇

前文は 188 文字で、

崇峻天皇五年 十一月 天皇は大臣馬子宿禰に殺された。後継は空位で、群臣は敏達天皇の皇后額田部皇女に即位を請うたが、皇后は辞退した。群臣が要請すること三度、要請を受けたので、天皇璽印を奉った。

天皇爲大臣馬子宿禰見殺 嗣位既空 群臣請渟中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女 以將令踐祚 皇后辭讓之 百寮上表勸進至于三 乃從之 因以奉天皇璽印

十二月 皇后は豐浦宮で天皇位に就いた。　　**皇后即天皇位於豐浦宮**

敏達天皇は崇峻天皇の 2 代前の天皇で、額田部皇女は皇太后のはずである。2 系統を 1 系統にしたほころびかもしれない。

元年 593 正月 佛舎利を法興寺の刹柱の基礎に置いた。

以佛舎利置于法興寺刹柱礎中

四月 厩戸豐聰耳皇子を皇太子とした。さらに摂政とし、全てを委ねた。　　**立厩戸豐聰耳皇子爲皇太子 仍録揶政 以萬機悉委焉**

九月　用明天皇を河内磯長陵に改葬した。

改葬橘豐日天皇(用明天皇)於河内磯長陵

　用明天皇紀では、磐余池上陵に葬られたと書かれている。陵(墓)を移すのは何故か。

この年、難波荒陵に四天王寺を造り始めた。

是歳　始造四天王寺於難波荒陵

二年 594　皇太子と大臣をよび、今三宝が交流し、もろもろの臣連らは親の恩に報いるため競って佛舎を造る時である。これを寺という。

詔皇太子及大臣　令興隆三寶是時　諸臣連等各爲君親之恩　競造佛舎　即是謂寺焉

三年 595　四月　沈水が淡路島に評釈した。　**沈水漂著於淡路嶋**

　水は木か。

五月　高麗僧の惠慈が帰化した。皇太子の師とした。

高麗僧惠慈歸化　則皇太子師之

この年、百済僧の慧聰がきた。両僧が仏教を弘演した。共に三宝の棟梁とした。　**是歳 百濟僧慧聰來之 此兩僧弘演佛教 並爲三寶之棟梁**

七月 將軍等が筑紫より帰った。　**將軍等至自筑紫**

　將軍は誰か。

四年 596 十一月 法興寺が完成した。大臣男善徳臣を寺司とした。この日、恵慈と慧聰の 2 僧は法興寺に住み始めた。

　法興寺造竟 則以大臣男善徳臣拜寺司 是日惠慈 惠二僧始住於法興寺

五年 597 四月 百済王は王子の阿佐を派遣し朝貢した。

百濟王遣王子阿佐朝貢

十一月 吉士磐金を新羅に派遣した。　**遣吉士磐金於新羅**

六年 598 四月 難波吉士磐金が新羅より還り、鵲を二隻献じた。難波杜で俾養した。・・・

難波吉士磐金至自新羅而獻鵲二隻 乃俾養於難波杜 因以巣枝而産之

八月 新羅が孔雀を貢いだ。　**新羅貢孔雀一隻**

七年 599 九月 百済は駱駝一疋、驢一疋、羊二頭、白雉一隻を貢いだ。　**百濟貢駱駝一疋 驢一疋 羊二頭 白雉一隻**

八年 600 二月 新羅と任那が攻め合った。天皇は任那を救うことを

望んだ。 **新羅與任那相攻 天皇欲救任那**

この年、境部臣を大将軍、穂積臣を副將軍とし、万を超える将兵で任那が新羅を撃つことを命じた。

是歲 命境部臣爲大將軍 以穂積臣爲副將軍(並闕名) 則將萬餘衆 爲任那擊新羅

九年 601 二月 皇太子は斑鳩に宮を興した。 **皇太子初興宮室于斑鳩**

三月 遣大伴連囓を高麗に遣坂本臣糠手を百濟に派遣し、任那を救うようにつげた。 **大伴連囓于高麗 遣坂本臣糠手于百濟 以詔之曰 急救任那**

五月 天皇は耳梨行宮に居した。 **天皇居于耳梨行宮**

九月 新羅の間諜の迦摩多が對馬に来た。これを捕え送った。上野に流した。 **新羅之間諜者迦摩多到對馬 則捕以貢之 流于上野**

十一月 新羅を議論した。 **議政新羅**

本稿では、斑鳩宮は河内から大和に浸出する前進基地ではないかと考えているが、成り立つか。

十年 602 二月 來目皇子を撃新羅將軍とし、諸神部及國造 伴造らと兵 2 万 5 千を授けた。

來目皇子爲擊新羅將軍 授諸神部、國造、伴造等 并軍衆二萬五千人

これまで将軍となったのは豪族であった。皇子を将軍とするはじめての例か。あるいは、皇子も臣下と格下げとなったか。
皇子を派遣しても(その兵力が減っても)安全なだけ王権が強くなった。

四月 將軍來目皇子は筑紫に到着し、屯嶋郡に進み、船を集め軍粮を運んだ。 **將軍來目皇子到于筑紫 乃進屯嶋郡 而聚船舶運軍粮**

六月 大伴連嚙と坂本臣糖手は百済より戻った。このとき、來目皇子は病に臥せり征討は出来なくなった。

大伴連嚙 坂本臣糖手 共至自百濟 是時 來目皇子臥病以不果征討

十月 百済僧の觀勒が來た。なお暦本・天文地理書と遁甲方術の書を貢いだ。このとき、書生三四人を選び、觀勒に学ばせた。陽胡史の施栓の玉陳は暦法を習い、大友村主高聰は天文遁甲を学び、山背臣日並は方術を学んだ。

百濟僧觀勒來之 仍貢暦本及天文地理書 并遁甲方術之書也 是時選書生三四人 以俾學習於觀勒矣 陽胡史祖玉陳習暦法 大友村主高聰學天文遁甲 山背臣日並立學方術 皆學以成業

閏十月 高麗僧の僧隆と雲聰は帰った。 **高麗僧僧隆 雲聰共來歸**

十一年 603 二月　來目皇子が筑紫で崩じた。駅使がこれを奏上した。天皇はこれを聞き、大いに驚き、皇太子と蘇我大臣をよび謂った：征新羅大將軍來目皇子が薨じた。大事に臨み遂行できなかったことが悲しい。殯は周芳娑婆で行われた。土師連猪手を派遣し殯の事を行わせた。・・・

來目皇子薨於筑紫　仍驛使以奏上　爰天皇聞之大驚　則召皇太子　蘇我大臣　謂之曰　征新羅大將軍來目皇子薨之　其臨大事而不遂矣　甚悲乎　仍殯于周芳娑婆　乃遣土師連猪手令掌殯事　故猪手連之孫曰娑婆連　其是之縁也　後葬於河内埴生山岡上

四月　來目皇子の兄の當麻皇子を征新羅將軍とした。

更以來目皇子之兄當麻皇子爲征新羅將軍

七月　當麻皇子は難波より船出した。　**當麻皇子自難波發船**

當麻皇子が播磨に到着したとき、従っていた妻の舍人姫が赤石で薨かった。赤石桧笠岡上に葬り、當麻皇子は還り、征討は出来なかった。

當麻皇子到播磨　時從妻舍人姫王薨於赤石　仍葬于赤石桧笠岡上　乃當麻皇子返之　遂不征討

十月　小墾田宮に遷った。　**遷于小墾田宮**

十一月　皇太子は諸大夫にいった：私は仏像をもっている。だれかこの仏像を拝するものはいないか。このとき、秦造河勝が進んでいっ

た：臣がこれを拝し仏像をいただきます。これにより、蜂岡寺を造った。

皇太子謂諸大夫曰 我有尊佛像 誰得是像 以恭拜 時秦造河勝進曰 臣拜之便受佛像 因以造蜂岡寺

十二月 冠位を始めた。

始行冠位 大徳 小徳 大仁 小仁 大禮 小禮 大信 小信 大義 小義 大智 小智 并十二階

十二年 604 正月 始賜冠位於諸臣 各有差

諸臣に冠位を始めて賜った。

隋書の記事からは、開皇二十年 600 の倭王は男王であり、それまでに冠位十二階が出来ていたことになる。

四月 皇太子は憲法十七條を自ら書いた。

皇太子親肇作憲法十七條（各條が続く）

是月 黄書畫師と山背畫師を始めて定めた。 **始定黄書畫師 山背畫師**

十三年 605 四月 天皇は皇太子・大臣・諸王・諸臣をあつめ、銅繍丈六佛像を各一体を造る誓願をした。鞍作鳥に造佛の工を命じた。このとき、日本国の天皇が仏像を造ることを聞いた高麗国の大興王は、

黄金 300 両を貢いだ。

天皇詔皇太子 大臣及諸王 諸臣 共同發誓願 以始造銅繡丈六佛像各一躯 乃命鞍作鳥爲造佛之工 是時 高麗國大興王聞日本國天皇造佛像 貢上黄金三百兩

十月 皇太子は斑鳩宮に居した。 **皇太子居斑鳩宮**

十四年 606 四月 銅繡丈六佛像が完成した。この日、丈六銅像を元興寺金堂にすえようとした時、仏像が金堂の戸より高く、堂に入れられなかった。工人らは戸を毀して入れようと話し合ったが、鞍作鳥は戸を毀さずに入れられた。その日に設斎を行った。・・・

銅繡丈六佛像並造竟 是日也 丈六銅像坐於元興寺金堂 時佛像高於金堂戸以不得納堂 於是 諸工人等議曰 破堂戸而納之 然鞍作鳥之秀工以不壞戸得入堂 即日設斎 於是 會集人衆不可勝數 自是年初毎寺 四月八日 七月十五日設齊

五月（・・・は鞍作鳥と父司馬達等の功績）大仁位を授けた。近江国坂田郡の水田廿町を与えた。鳥は、この田に金剛寺を造った。今の南淵坂田尼寺である。

・・・賜大仁位。因以給近江國坂田郡水田廿町焉。鳥以此田爲天皇作金剛寺。是今謂南淵坂田尼寺

Wikipedia「鞍作止利」では

飛鳥時代の渡来系の仏師、技術者。名は鳥とも記される。姓は村主。司馬達等の孫で、鞍部多須奈の子。

仏教の信仰に篤い一族であり、父の多須奈は用明天皇のために坂田寺の建立を発願し、のちに出家して、日本で最初の僧侶である徳斉法師となったと伝えられる。蘇我氏と深いつながりがあったと見られ、大化の改新により蘇我氏が失脚するとともに止利様式の作品も見られなくなった。

七月　天皇は皇太子に勝鬘經を講じるように請うた。3 日にわたって説いた。　**天皇請皇太子令講勝鬘經 三日 説竟之**

この年、皇太子は岡本宮で法華経を講じた。天皇は大いに喜び、播磨国の水田百町を皇太子に施した。斑鳩寺に納めた。

是歳 皇太子亦講法華經於岡本宮 天皇大喜之 播磨國水田百町施于皇太子因以納于斑鳩寺

十五年 607 二月　壬生部を定めた。　**定壬生部**

皇太子と大臣は百寮を率いて、神祇を祭り拜した。

皇太子及大臣率百寮 以祭拜神祇

何処で行ったか。斑鳩宮か小墾田宮か豐浦宮か。

十五年七月　大禮の小野臣妹子を大唐に派遣した。鞍作福利を通訳とした。　**大禮小野臣妹子遣於大唐　以鞍作福利爲通事**

　通訳が始めて現れる。これは、百済や新羅とは通訳の必要が無かったのか。

この年の冬、倭国では高市池・藤原池・肩岡池・菅原池を作り、山背国では栗隈に大溝を掘り、河内国では戸苅池と依網池を作った。また、各国に屯倉を置いた。

　是歲冬　於倭國作高市池　藤原池　肩岡池　菅原池　山背國掘大溝於栗隈　且河内國作戸苅池　依網池　亦每國置屯倉

十六年 608 四月　小野臣妹子が大唐より還った。唐国は妹子臣を蘇因高と号した。大唐の使い裴世清と 12 人の配下は妹子臣について筑紫に着いた。難波吉士雄成を派遣し、大唐の客裴世清らを召した。唐客の為、難波高麗館の上に新館を造った。

　小野臣妹子至自大唐　唐國號妹子臣曰蘇因高即大唐使人裴世清　下客十二人從妹子臣至於筑紫　遣難波吉士雄成　召大唐客裴世清等　爲唐客更造新館於難波高麗館之上

隋書の記事

大業三年 607 其王多利思北孤遣使朝貢 使者曰 ・・・

明年 608 上遣文林郎裴清使于倭國

が対応している。

裴清が裴世清となっている。

難波吉士は何回か現れる。

敏達天皇十三年　難波吉士木蓮子

推古天皇六年　　難波吉士磐金

十七年　難波吉士徳摩呂

Wikipedia「吉士磐金」では、

吉士は元来、古代朝鮮における首長・族長を意味する語による敬称であり、転じて姓や氏になったものである。難波吉士・三宅吉士・草香部吉士などがあり、本拠地は摂津国嶋下郡吉志部村(現在の大阪府吹田市岸部町)。新撰姓氏録・摂津国皇別によると、吉志氏は難波忌寸同祖、大彦命之後也となっており、一族は外交事務で多く活躍している。

六月　客らは難波津に泊った。この日、飾船30艘で客らを江口で迎え、新館に安置した。中臣宮地連摩呂・大河内直糠手・船史王平らに客を担当させた。ここで、妹子臣は奏上した：臣がまかり帰ろうとしたとき、唐の皇帝は書を臣に託した。しかるに、百済国を通り過ぎようとしたとき、百済人がこれを掠め取り取り返せなかった。ここで、群臣は協議して、大国の書を失うのは、使いといえども、死罪に相当し、流刑に処する。天皇はいった：妹子は書を失う罪はあるが、大国の客がこれを聞けばよしとしないと思われ、罪とすべきでない。これより、赦し処分しないこととした。

客等泊于難波津　是日　以餝船卅艘迎客等于江口　安置新館　於是　以中臣宮地連摩呂　大河内直糠手船史王平爲掌客　爰妹子臣奏之曰　臣參還之時　唐帝以書授臣　然經過百濟國之日　百濟人探以掠取　是以不得上　於是羣臣議之曰　夫使人雖死之不失旨　是使矣　何怠之失大國之書哉　則坐　流刑　時天皇勅之曰。妹子雖有失書之罪　輙不可罪　其大國客等聞之亦不良　乃赦之不坐也

八月　唐客が入京した。この日、餝騎七十五疋を派遣し、海石榴市衢で唐客を迎えた。額田部連比羅夫が禮辭を告げた。

唐客入京　是日　遣餝騎七十五疋而迎唐客於海石榴市衢　額田部連比羅夫以告禮辭焉

唐客を朝廷に召した。使いの旨を奏上した。このとき、阿倍鳥臣と

物部依網連が導者を務めた。ここで、大唐国の信物を宮庭に置き、主使の裴世清は親書をもち、再度使いの旨を言上した。その書には・・・

召唐客於朝庭 令奏使旨 時阿倍鳥臣 物部依網連抱二人爲客之導者也 於是大唐之國信物置於庭中 時使主裴世清親持書 兩度再拜言上使旨而立 其書曰 ・・・

唐客らを朝廷で饗した。 **饗唐客等於朝**

九月 饗客らを難波大郡で饗した。 **客等於難波大郡**

難波大郡はどこか。

唐客の裴世清罷り帰った。ふたたび、小野妹子臣大使を、吉士雄成を小使、福利を逸事とし、唐客に従って派遣した。天皇は唐帝に

唐客裴世清罷歸 則復以小野妹子臣爲大使 吉士雄成爲小使 福利爲逸事 副于唐客而遣之 爰天皇聘唐帝 其辭曰 東天皇敬白西皇帝 ・・・

この年、新羅人が多数化來した。返書をたずさえさせた。そこには、東天皇は西皇帝に・・・ **是歲 新羅人多化來**

筑紫大宰が奏上した：百済僧道欣・惠彌爲首十人・俗人七十五人が肥後国葦北津に漂白した。このとき、遣難波吉士徳摩呂と船史龍は何処から来たかと問うた。これに対し、百済王には呉国に行くように命じられたが、乱があり入ることが出来なかった。国に引き返したが、暴風に遇い、幸いにも聖帝の辺境に漂白でき、大いに喜んでいると答

えた。

十七年 609 四月 筑紫大宰奏上言 百濟僧道欣 惠彌爲首一十人 俗人七十五人 泊于肥後國葦北津 是時 遣難波吉士德摩呂 船史龍以問之曰 何來也 對曰 百濟王命以遣於呉國 其國有亂不入 更返於本郷 忽逢暴風漂蕩海中 然有大幸而泊于聖帝之邊境 以歡喜

五月 徳摩呂らは帰って上奏した。徳呂と龍の二人は引き返し、百済人を本国に送った。対馬に到着したとき、道人ら十一人皆が留まることを望んだ。上表して彼らを留めた。よって、元興寺に住まわせた。

徳摩呂等復奏之 則返徳呂 龍二人 而副百濟人等送本國 至于對馬以道人等十一皆請之欲留 乃上表而留之 因令住元興寺

九月 小野臣妹子らが大唐より還った。ただ通事の福利は戻らなかった。 **小野臣妹子等至自大唐 唯通事福利不來**

十七年の記事に呉國が現れている。九月の記事には大唐があり、を呉國は中国の統一王朝をささないことが考えられる。

十八年 610 三月 高麗王は僧曇徴と法定を貢上した。曇徴は五経を知り、彩色と紙墨を作ることができた。また碾磑を造った。これが初

めの碾磑作成である。

高麗王貢上僧曇徴 法定 曇徴知五經 且能作彩色及紙墨 并造碾磑 盖造碾磑始于是時歟

コトバンク「碾磑」では、中国の石臼のこと、と書かれている。

七月 新羅の使い沙喙部奈末竹世士と任那の使い喙部大舍首智買が筑紫に到着した。

新羅使人沙喙部奈末竹世士 與任那使人喙部大舍首智買 到于筑紫

九月 任那使人を新羅に派遣した。 **遣使召新羅 任那使人**

十月 新羅と任那の使いが京に着いた。この日、額田部連比羅夫を迎新羅客莊馬の長、膳臣大伴を迎任那客莊馬の長とし、阿斗河邊舘に安置した。

新羅 任那使人臻於京 ▼是日命額田部連比羅夫爲迎新羅客莊馬之長 以膳臣大伴爲迎任那客莊馬之長 即安置阿斗河邊舘

客らは朝庭に拝した。ここで、秦造河勝と土部連菟を新羅の導者に、間人連臨蓋と阿閇臣大篭を任那の導者に命じた。

客等拜朝庭 於是 命秦造河勝土部連菟爲新羅導者 以間人連臨蓋 阿閇臣大篭爲任那導者

使いを朝廷でもてなした。河内漢直贄を新羅の共食者に、錦織首久僧を任那の共食者とした。

饗使人等於朝 以河内漢直贄爲新羅共食者 錦織首久僧爲任那共食者

客は礼をして帰った。 **客等禮畢以歸焉**

十九年 611 五月 兎田野で薬草を採取した。 **藥獵於兎田野**

八月 新羅は沙喙部奈末北叱智を任那は習部大舍親智周智を派遣し朝貢した。 **新羅遣沙喙部奈末北叱智 任那遣習部大舍親智周智 共朝貢**

廿年 612 二月 皇太夫人の堅臨媛を桧隈大陵に改葬した。

改葬皇太夫人堅臨媛於桧隈大陵

五月 羽田で薬草を採取した。 **藥獵之 集于羽田**

この年、百済国より化來するものがいた。顔や体に白斑があり、白癩者であった。 **是歲 自百濟國有化來者 其面身皆斑白 若有白癩者乎**

廿一年 613 十一月 掖上池・畝傍池・和珥池を作り、難波より今日にいたる大道を置いた。 **作掖上池 畝傍池 和珥池 又自難波至京置大道**

二月 皇太子は片岡で遊行した。 **皇太子遊行於片岡**

廿二年 614 六月 犬上君御田鍬と矢田部造を大唐に派遣した。

遣犬上君御田鍬 矢田部造(闕名)於大唐

廿三年 615 九月 犬上君御田鍬と矢田部造は、百済の使いを伴って、大唐より戻った。

犬上君御田鍬 矢田部造至自大唐 百濟使則從犬上君而來朝

十一月 饗百済の客をもてなした。 **百濟客矣**

高麗僧の惠慈が帰国した。 **高麗僧惠慈歸于國**

廿四年 616 三月 掖玖人 3 人が帰化した。 **掖玖人三口歸化**

五月 夜句人 7 人が来た。 **夜句人七口來之**

七月 掖玖人 20 人が来た。前に来た人と併せると 30 人である。皆は朴井に安置した。皆死んだので、還すに及ばなかった。

亦掖玖人廿口來之 先後并卅人 皆安置於朴井 未及還皆死焉

七月 新羅は奈末竹世士を派遣し仏像を貢いだ。

新羅遣奈末竹世士貢佛像

廿六年 618 八月 高麗は使いを派遣し方物を貢いだ。隋の煬帝と 30 万の衆が攻めてきた。これを悉く返し、我々は撃ち破った。ゆえに、俘虜の貞公、普通人二人、鼓吹弩と抛石の類十物と土物の駱駝一匹を献ずる。

高麗遣使貢方物 因以言 隋煬帝興卅萬衆攻我 返之爲我所破 故貢獻俘虜貞公 普通二人 及鼓吹弩抛石之類十物并土物駱駝一疋

貢を用いているが、贈り物にちかいかもしれない。隋を追い返した高麗に倭にみつぐことは考えにくい。今後の援軍を期待することは考えられる。

この年、河邊臣を安芸国に派遣し、造船を命じた。

是年 遣河邊臣(闕名)於安藝國令造舶

廿八年 620 掖玖人が 2 人伊豆嶋に流れ着いた。

掖玖人二口流來於伊豆嶋

この年、皇太子と嶋大臣は天皇紀と国紀、臣連伴造国造百八十部と公民ら本記の編纂を決めた。

是歳 皇太子 嶋大臣共議之録天皇記及國記 臣連伴造國造百八十部并公民等本記

廿九年 621 豐聰耳皇子命が斑鳩宮で薨じた。

半夜厩戸豐聰耳皇子命薨于斑鳩宮

この月、上宮太子を磯長陵に葬った。 **是月 葬上宮太子於磯長陵**

上宮太子という呼称は ？

ここまでの事蹟は推古天皇か聖徳太子か。

この年、新羅は奈末伊彌買を派遣し朝貢した。・・・

是歳 新羅遣奈末伊彌買朝貢 仍以表書奏使旨 凡新羅上表 蓋始起于此時歟

卅一年 623 七月 新羅は大使奈末智洗爾、任那は達率奈末智を派遣し、佛像一具と金塔・舎利、大潅頂幡一具・小幡十二條を貢いだ。仏

像を葛野秦寺に、他の舎利・金塔・潅頂幡などは皆四天王寺に納めた。このとき、大唐學問僧の惠齊・惠光・醫惠はいった.・・・唐国学ものは皆学を為し終え・・・。

新羅遣大使奈末智洗爾 任那遣達率奈末智 並來朝 仍貢佛像一具 及金塔并舎利 且大潅頂幡一具 小幡十二條 即佛像居於葛野秦寺 以餘舎利 金塔 潅頂幡等皆納于四天王寺 是時 大唐學問者僧惠齊 惠光 及醫惠日 福因等並從智洗爾等來之 於是 惠日等共奏聞曰 留于唐國學者 皆學 以成業 應喚 且其大唐國者法式備定之珍國也 常須達

この年、新羅は任那を伐ち、任那は新羅に附した。ここにおいて、天皇は新羅を討とうとした。

是歳 新羅伐任那 任那附新羅 於是天皇將討新羅・・・

十一月 磐金と倉下らは新羅より還った。大臣の問いに答えていった。・・・

磐金 倉下等至自新羅 時大臣問其状 對曰 ・・・

卅二年 624 僧觀勒を僧正に、鞍部徳積を僧都に、阿曇連を法頭に任じた。 **以觀勒僧爲僧正 以鞍部徳積爲僧都 即日以阿曇連(闕名)爲法頭**

卅三年 625 高麗王は僧惠潅を贈った。僧正に任じた。

高麗王貢僧惠潅 仍任僧正

卅六年 628 三月 天皇が崩じた。南庭で殯を行った。

天皇崩之(時年七十五) 即殯於南庭

九月 竹田皇子の陵に葬った。 **葬竹田皇子之陵**

百済・新羅との記事は欽明天皇紀続きとも思える。

開皇二十年 600 の記事と日本書紀の推古天皇十五年以前の記事とは、西暦が合わない。

推古天皇紀は、ここまでの天皇紀と比べて、質の差を感じる。日本書紀作成時からは 150 年ほど前になる。現在からいえば、明治時代となる。お爺さんのお爺さんの話はかなり伝えられていると思われ、かなりの人が知っている話は変更を加えることは躊躇されるであろう。

Wikipedia「天皇」(現在は変更されているようである。)

唐の第三代皇帝高宗は、在位の途中の上元元年(674 年)8 月に皇帝の称号を天皇に、皇后の称号を天后に、同時にセットで変更した。崩御後も、天后である則天武后によって天皇の称号を贈られ、諡号を天皇大聖大弘孝皇帝と記録された。

日本の第四十代天武天皇は、日本で初めて天皇と称された人物。ただし在位中のいつから天皇と称したのかは明らかでなく諸説がある。遅くとも天武六年

(677 年)12 月には天皇号が使用されていた。その孫の文武天皇の時、大宝律令で天皇の号が法制化され、天武天皇以降、およびその系譜を遡って天皇の諡号が贈られた。

倭国では首長のことを、国内では大王(おおきみ、治天下大王)あるいは天王と呼び、対外的には倭王・倭国王・大倭王等と称された。

24.4. 聖徳太子

24.2 節で述べたが、新唐書に **欽明之十一年 直梁承聖元年** に続き **次海達 次用明 亦曰目多利思比孤 直隋開皇末 始與中國通** が書かれている。

前の記事については、承聖は梁の世祖元帝の年号で、承聖元年は 552 年である。これからは、欽明元年は 542 年、欽明 32 年は 573 年となるという作業仮説 23.1 を得た。この時の新羅の王は真興王 540-576 である。正史の記事は、梁書で **高祖卽位 進武號征東將軍**、南史で **梁武帝即位 進武號征東大將軍** が見つかった。高祖は初代皇帝で、在位期間は 502 年から 549 年である。

後の記事を見逃してきた。開皇は隋の最初の元号で 581 年から 600 年であり、その末年は 600 年となる。用明天皇の在位は 585 年から 587 年であり、合わない。

欽明天皇と用明天皇が何故取り挙げられているのか、という疑問がまず浮かぶ。この書き込みについては、遣唐使についても記録から作者が見つけたのではないかと思っている。

隋書における **開皇二十年 600 倭王姓阿每 字多利思北孤 號阿輩鷄彌 遣使詣闕・・・王妻號雞彌 後宮有女六七百人 名太子爲利歌彌多弗利** という記事を

取り上げている。この記事に対応する記事は日本書紀になく、推古天皇 593-628 が在位期間している。

隋書では次の記事が書かれている。

大業三年 607 其王多利思北孤遣使朝貢

明年 608 上遣文林郎裴清使于倭國

これには推古天皇十六年 608 の次の記事が対応している。

四月小野臣妹子至自大唐 唐國號妹子臣曰蘇因高即大唐使人裴世清

下客十二人 從妹子臣至於筑紫

用明天皇は「考察真名野長者物語」 http://sence-net.com/manano-con.html に現れる。

推古天皇紀の記事は倭王であった聖徳太子が行ったもので、法隆寺は大和征服の橋頭保ではなかったのかと思ってきた。

欽明天皇紀の考察で、和風諡号に天がつく天皇を挙げた。

天照大神、　天之忍穂耳命、

欽明天皇(天国排開広庭尊)、

天智天皇(天命開別尊)、　天武天皇(天渟中原瀛真人尊)

さらに、和風諡号に豊が付く天皇は次である。

用明天皇 橘豊日尊、　推古天皇 豊御食炊屋姫尊、

聖徳太子 豊聡耳命、　皇極天皇 天豊財重日足姫尊

孝徳天皇　天万豊日尊

豊が付く天皇の系列と付かない天皇の系列とで抗争があったのではないかと単純に思ったが、これは確認できず、ほぼ諦めていた。

聖徳太子の后妃とその皇子皇女と蘇我氏の系図を示しておく。

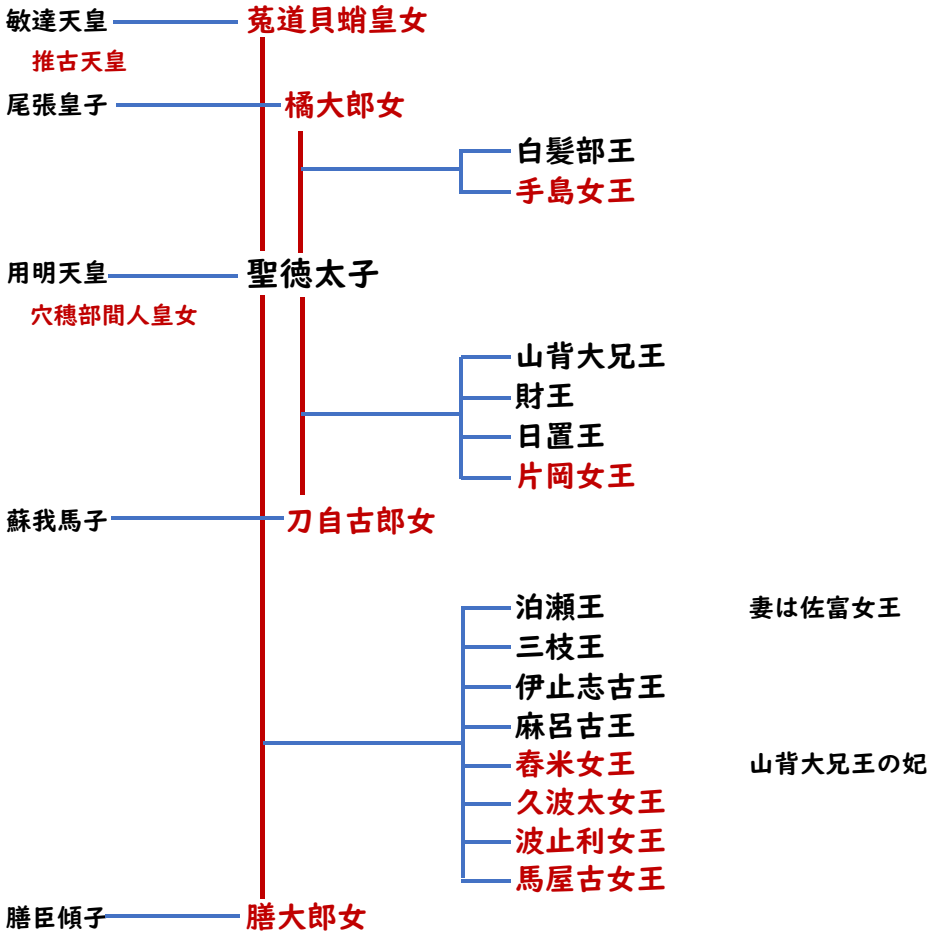

図 24.1 聖徳太子の妃とその皇子皇女（Wikipedia「聖徳太子」から）

次は蘇我氏の系図である。

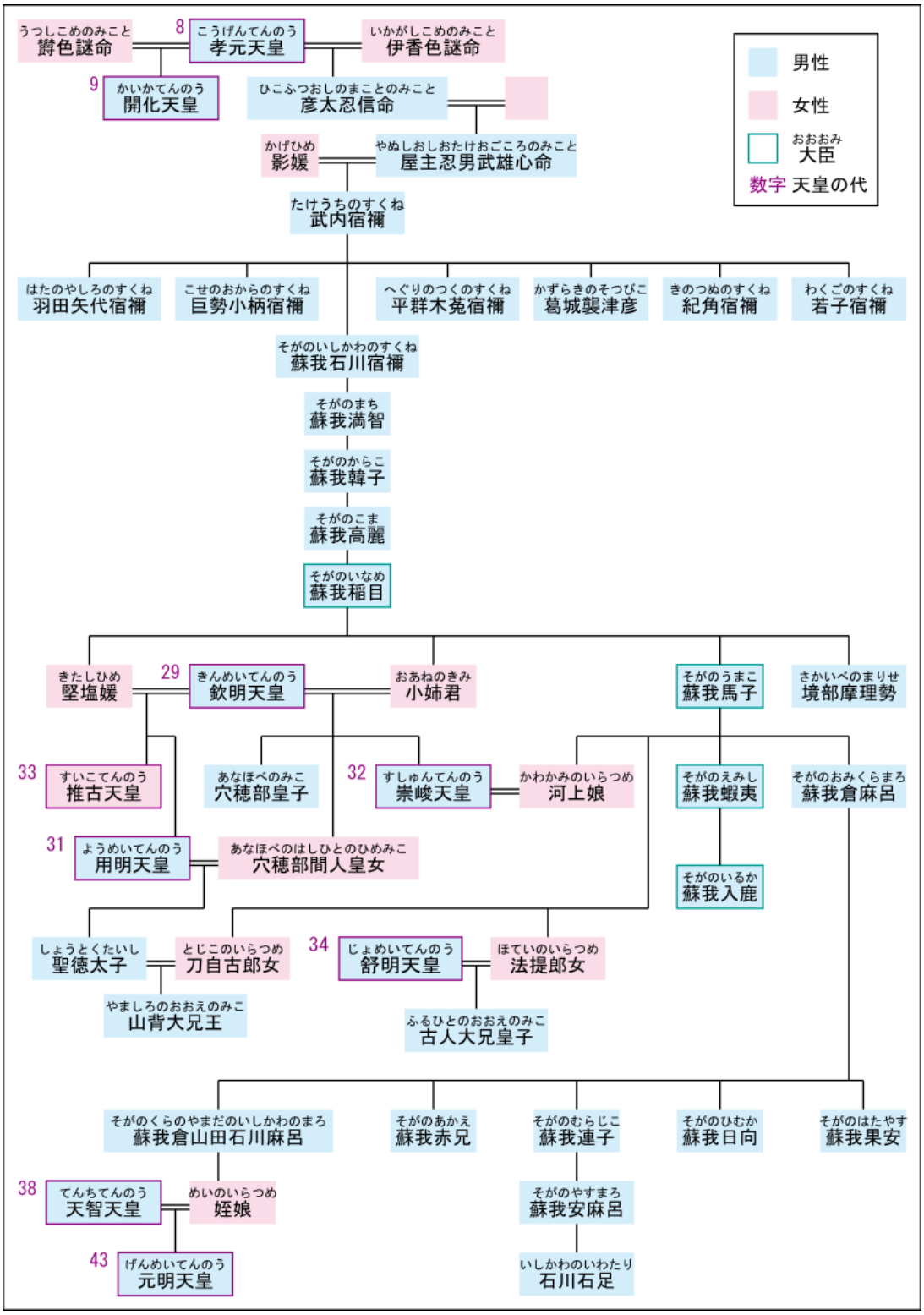

図 24.2 蘇我氏系図（Wikipedia「蘇我氏」から）

24.5. 裴清

文林郎

weblio「文林郎」では、古代の官職。少初位上の別称。

Wikipedia「散官」唐の散官表：文散官では、従九品上:文林郎。

Wikipedia「裴世清」

裴世清(生没年不詳)は、6 世紀後半-7 世紀前半の中国隋・唐代の官吏。本貫は河東郡聞喜県。隋の煬帝による命令で倭國(倭国)を訪れた使者として名が知られている。隋書では裴清と記されている。

唐代に 17 人の宰相を生んだ河東郡の大姓裴氏の支族の中眷裴氏の出身で、父の名は裴著。子は斉州司馬の裴嘉陵がいる。唐では主客郎中・江州刺史をつとめたことが伝えられている。

派遣した王朝の正史に裴清とされているのに、裴世清としているのは何故だろうか。

難波大郡を長い間難波大都と読み違えていた、どちらにせよ何処を指すのだろうが。

難波大郡が現れるのは

推古天皇九月十六年 608 饗客等於難波大郡　唐客裴世清罷歸

で、この記事から、難波大郡は唐に行ける船の港かその近くにあった。

難波大郡はこの他に

（欽明之十一年 直梁承聖元年）

欽明天皇廿二年 561 於難波大郡序諸蕃

舒明天皇二年 630 是歳 改脩理難波大郡及三韓館

である。

あとがき

本稿‘正史を彷徨う’は終了とする。理由としては、何となくマンネリ感、あるいは、行き詰まり感を抱いていた。この一因として、書かれている内容も増え、基礎知識の不足から、関連性を検討することが、難しくなってきて、作業仮説を設定できなくなってきたことが考えられる。ここで、初めから見直すのが、遠回りかもしれないが、良いのではないかと判断した

結果的には、あるいは、タイトルのように彷徨ったまま終わることになったようだ。

- 新唐書の次の文

欽明之十一年 直梁承聖元年 次海達 次用明 亦曰目多利思比孤 直隋開皇末始與中國通

を、今まで見逃してきたが、何か言えるかもしれない。

継体天皇と欽明天皇は親子となっているが、兄弟となっている天智天皇と天武天皇と似た感じを持つ。

付録A 隋書倭國条・旧唐書倭國条日本國条・新唐書日本条

隋書倭國条

倭國 在百濟 新羅東南 水陸三千里 于大海之中依山島而居 魏時譯通中國 三十余國 皆自稱王 夷人不知里數 但計以日 其國境東西五月行 南北三月行 各至於海 其地勢東高西下 都於邪靡堆 則《魏志》所謂邪馬台者也 古云去樂浪郡境及帶方郡並一萬二千里 在會稽之東 與儋耳相近 漢光武 時 遣使入朝 自稱大夫 安帝時 又遣使朝貢 謂之倭奴國 桓 靈之間 其國大亂 遞相攻伐 歷年無主 有女子名卑彌呼 能以鬼道惑衆 於是國人共立爲 王 有男弟 佐卑彌理國 其王有侍婢千人 罕有見其面者 唯有男子二人給王飲食 通傳言語 其王有宮室樓觀 城柵皆持兵守衛 爲法甚嚴 自魏至於齊 梁 代與中國相通

開皇二十年 倭王姓阿每 字多利思北孤 號阿輩雞彌 遣使詣闕 上令所司訪其風俗 使者言倭王以天爲兄 以日爲弟 天未明時出聽政 跏趺坐 日 出便停理務 云委我弟 高祖曰:「此太無義理 」於是訓令改之 王妻號雞彌 後宮有女六七百人 名太子爲利歌彌多弗利 無城郭 內官有十二等:一曰大德 次小德 次大仁 次小仁 次大義 次小義 次大禮 次小禮 次大智 次小智 次大信 次小信 員無定數 有軍尼一百二十人 猶中國牧宰 八十戶置一伊尼 翼 如今裏長也 十伊尼翼屬一軍尼 其服飾 男子衣裙襦 其袖微小 履如屨形 漆其上 系之於腳 人庶多跣足

不得用金銀爲飾 故時衣橫幅 結束相連而無 縫 頭亦無冠 但垂發於兩耳上 至隋 其王始制冠 以錦彩爲之 以金銀鏤花爲飾 婦人束發於後 亦衣裙襦 裳皆有襈 躭竹爲梳 編草爲薦 雜皮爲表 緣以 文皮 有弓 矢 刀 槊 弩 矟 斧 漆皮爲甲 骨爲矢鏑 雖有兵 無征戰 其王朝會 必陳設儀仗 奏其國樂 戶可十萬

其俗殺人強盜及奸皆死 盜者計贓酬物 無財者沒身爲奴 自餘輕重 或流或杖 每訊究獄訟 不承引者 以木壓膝 或張強弓 以弦鋸其項 或置小石 于沸湯中 令所競者探之 云理曲者即手爛 或置蛇甕中 令取之 云曲者即螫手矣 人頗恬靜 罕爭訟 少盜賊 樂有五弦 琴 笛 男女多黥臂點面文身 沒水 捕魚 無文字 唯刻木結繩 敬佛法 於百濟求得佛經 始有文字 知卜筮 尤信巫覡 每至正月一日 必射戲飲酒 其餘節略與華同 好棋博 握槊 樗蒲之戲 氣候溫暖 草木冬青 土地膏腴 水多陸少 以小環掛鷺鷥項 令入水捕魚 日得百餘頭 俗無盤俎 藉以槲葉 食用手哺之 性質直 有雅風 女多男少 婚嫁不 取同姓 男女相悅者即爲婚 婦入夫家 必先跨犬 乃與夫相見 婦人不淫妒 死者斂以棺郭 親賓就屍歌舞 妻子兄弟以白布制服 貴人三年殯于外 庶人蔔日而 瘞 及葬 置屍船上 陸地牽之 或以小輿 有阿蘇山 其石無故火起接天者 俗以爲異 因行禱祭 有如意寶珠 其色青 大如雞卵 夜則有光 云魚眼精也 新 羅 百濟皆以倭爲大國 多珍物 並敬仰之 恆通使往來

大業三年 其王多利思北孤遣使朝貢 使者曰:「聞海西菩薩天子重興佛法 故遣朝拜 兼沙門數十人來學佛法 」其國書曰「日出處天子至書日沒處天 子無恙」云云

帝覽之不悅 謂鴻臚卿曰：「蠻夷書有無禮者 勿復以聞 」明年 上遣文林郎裴清使于倭國 度百濟 行至竹島 南望躰羅 國 經都斯麻國 乃在大海中 又東至一支國 又至竹斯國 又東至秦王國 其人同于華夏 以爲夷洲 疑不能明也 又經十余國 達於海岸 自竹斯國以東 皆附 庸於倭 倭王遣小德阿輩台 從數百人 設儀仗鳴鼓角來迎 後十日 又遣大禮 哥多毗 從二百余騎郊勞 既至彼都 其王與清相見 大悅 曰：「我聞海西有 大隋 禮義之國 故遣朝貢 我夷人僻在海隅 不聞禮義是以稽留境內 不即相見 今故清道飾館 以待大使 冀聞大國惟新之化 」清答曰：「皇帝德並二儀 澤流四海 以王慕化 故遣行人來此宣諭 」既而引清就館 其後清遣人謂其王曰：「朝命既達 請即戒途 」於是設宴享以遣清 復令使者隨清來貢方物 此後遂 絕

旧唐書倭國条

倭國者 古倭奴國也 去京師一萬四千里 在新羅東南大海中 依山島而居 東西五月行 南北三月行 世與中國通 其國 居無城郭 以木爲柵 以草 爲屋 四面小島五十余國 皆附屬焉 其王姓阿每氏 置一大率 檢察諸國 皆畏附之 設官有十二等 其訴訟者 匍匐而前 地多女少男 頗有文字 俗敬佛法 並皆跣足 以幅布蔽其前後 貴人戴錦帽 百姓皆椎髻 無冠帶 婦人衣純色裙 長腰襦 束發於後 佩銀花 長八寸 左右各數枝 以明貴賤等級 衣服之制 頗 類新羅

貞觀五年 遣使獻方物 太宗矜其道遠 敕所司無令歲貢 又遣新州刺史高表仁持節往撫之 表仁無綏遠之才 與王子爭禮 不宣朝命而還 至二十二年 又附新羅奉表 以通起居

旧唐書日本國条

日本國者 倭國之別種也 以其國在日邊 故以日本爲名 或曰：倭國自惡其名不雅改爲日本 或云：日本舊小國 併倭國之地 其人入朝者 多自矜大 不以實對 故中國疑焉 又云：其國界東西南北各數千里 西界 南界咸至大海 東界 北界有大山爲限 山外即毛人之國

長安三年 其大臣朝臣真人來貢方物 朝臣真人者 猶中國戶部尚書 冠進德冠 其頂爲花 分而四散 身服紫袍 以帛爲腰帶 真人好讀經史 解屬文 容止溫雅 則天宴之於麟德殿 授司膳卿 放還本國

開元初 又遣使來朝 因請儒士授經 詔四門助教趙玄默就鴻臚寺教之 乃遺玄默闊幅布以爲束修之禮 題云「白龜元年調布」 人亦疑其偽 所得錫 賚 盡市文籍泛海而還 其偏使朝臣仲滿 慕中國之風 因留不去 改姓名爲朝衡 仕曆左補闕儀王友 衡留京師五十年 好書籍 放歸鄉 逗留不去 天寶十 二年 又遣使貢 上元中 擢衡爲左散騎常侍 鎮南都護 貞元二十年 遣使來朝 留學生橘免勢 學問僧空海 元和元年 日本國使判官高階真人上言：「前件學 生 藝業稍成 願歸本國便請與臣同歸 」從之 開成四年 又遣使朝貢

新唐書倭・日本条

日本 古倭奴也 去京師萬四千里 直新羅東南 在海中 島而居 東西五月行 南北三月行 國無城郛 聯木爲柵落 以草茨屋 左右小島五十餘 皆 自名國 而臣附之 置本率一人 檢察諸部 其俗多女少男 有文字 尚浮屠法 其官十有二等 其王姓阿每氏 自言初主號天御中主 至彥瀲 凡三十二世 皆以「尊」爲號 居築紫城 彥瀲子神武立 更以「天皇」爲號 徙治大和州 次曰綏靖 次安寧 次懿德 次孝昭 次天安 次孝靈 次孝元 次開化 次崇神 次垂 仁 次景行 次成務 次仲哀 仲哀死以開化曾孫女神功爲王 次應神 次仁德 次履中 次反正 次允恭 次安康 次雄略 次清寧 次顯宗 次仁賢 次武 烈 次繼體 次安閒 次宣化 次欽明 欽明之十一年直梁承聖元年 次海達 次用明 亦曰目多利思比孤 直隋開皇末 始與中國通 次崇峻 崇峻死 欽明之 孫女雄古立 次舒明 次皇極 其俗椎髻 無冠帶 跣以行 幅巾蔽後 貴者冒錦；婦人衣純色裙 長腰襦 結髮於後 至煬帝 賜其民錦線冠 飾以金玉 文布爲 衣 左右佩銀蘓長八寸 以多少明貴賤

太宗貞觀五年 遣使者入朝 帝矜其遠 詔有司毋拘歲貢 遣新州刺史高仁表往諭與王爭禮不平 不肯宣天子命而還 久之 更附新羅使者上書

永徽初 其王孝德即位 改元曰白雉 獻虎魄大如斗 碼碯若五升器 時新羅爲高麗百濟所暴 高宗賜璽書 令出兵援新羅 未幾孝德死 其子天豐財 立 死 子天智立明年 使者與蝦蟆人偕朝 蝦蟆亦居海島中 其使者須長四尺許 珥箭於首 令人戴

瓠立數十步 射無不中 天智死 子天武立 死 子總持 立 咸亨元年 遣使賀平高麗 後稍習夏音 惡倭名 更號日本 使者自言 國近日所出 以爲名 或云日本乃小國 爲倭所并 故冒其號 使者不以情 故疑焉 又妄誇其國都方數千里 南 西盡海 東 北限大山 其外即毛人云

長安元年 其王文武立 改元曰太寶 遣朝臣真人粟田貢方物 朝臣真人者 猶唐尚書也 冠進德冠 頂有華蘓四披 紫袍帛帶 真人好學 能屬文 進 止有容 武后宴之麟德殿 授司膳卿 還之 文武死 子阿用立 死 子聖武立 改元曰白龜 開元初粟田復朝 請從諸儒受經 詔四門助教趙玄默即鴻臚寺爲 師 獻大幅布爲贄 悉賞物貿書以歸 其副朝臣仲滿慕華不肯去 易姓名曰朝衡 曆左補闕 儀王友 多所該識 久乃還 聖武死 女孝明立 改元曰天平勝寶 天 寶十二載 朝衡復入朝 上元中 擢左散騎常侍 安南都護 新羅梗海道 更繇明 越州朝貢 孝明死 大炊立 死以聖武女高野姬爲王 死 白壁立 建中元 年 使者真人興能獻方物 真人 蓋因官而氏者也 興能善書 其紙似繭而澤 人莫識 貞元末 其王曰桓武 遣使者朝 其學子橘免勢 浮屠空海願留肄業 曆二 十餘年 使者高階真人來請免勢等俱還 詔可次諾樂立 次嵯峨 次浮和 次仁明 仁明直開成四年 復入貢 次文德 次清和 次陽成 次光孝 直光啟元年